

小泉八雲の教育

Koizumi Yakumo's Thoughts on Education

貝 嶋 崇

KAIJIMA Takashi

キーワード：ラフカディオ・ハーン， 島根県尋常中学校， 帝国大学， 想像力， 英米児童文学

SUMMARY

Koizumi Yakumo (Lafcadio Hearn, 1850-1904) was known in the United States as a journalist and translator. After arriving in Japan, he added the activities of an English teacher, English literature researcher, essayist, and writer. As an English teacher, he educated many talented students. He taught at Shimane Prefectural Junior High School and Shimane Prefectural Normal School (1890, 9 ~ 1891, 11) for one year, Kumamoto Fifth High School (1891, 11 ~ 1894, 11) for three years, Tokyo Imperial University (1896, 9 ~ 1903, 3) for seven years, and Waseda University (1904, 2 ~ 1904, 9) for six months. He taught at Waseda University (1904, 2 ~ 1904, 9) for a total of 11 and a half years, and finished his life as an English teacher. He is highly respected by the students he taught. This paper focuses on the education of Koizumi Yakumo, who practiced such education, and consider the education he aimed for based on his writings. I discuss how his view of education was cultivated through practical education.

はじめに

小泉八雲 (Lafcadio Hearn, 1850-1904, 以下小泉八雲) は雑誌記者, 翻訳者としてアメリカで活躍し, 来日してからは, 英語教師, 英文学研究家, 随筆家および作家としての活動も加わった。英語教師としては多くの有能な教え子を輩出している。まず, 島根県尋常中学校と島根県尋常師範学校 (1890, 9 ~ 1891, 11) での1年を皮切りに, 熊本第五高等中学校 (1891, 11 ~ 1894, 11) で3年, また帝国大学, 東京帝国大学 (1896, 9 ~ 1903, 3) で7年, さらに早稲田大学 (1904, 2 ~ 1904, 9) で半年間と合わせて約11年半に及ぶ教育活動を行い, その一生を英語教師として終えている。彼の指導を受けた教え子たちからは非常に高く尊敬されている。本論では, そのような教育を実践した小泉八雲の教育に焦点を当て, 彼の目指した教育について彼の著作をもとに考えてみたい。また, その教育観が実践の教育を通じてどのように培われたのかを論じたい。

初めての教育実践

1891年に小泉八雲は当時の教頭だった西田千太郎に伴われて島根の片田舎の取材旅行に出かけようとした時のことだ。取材の場所をさまざま提案したが、結局小泉八雲はそれに反対し、むしろ教育を受けた学者のいない場所を求めた。その理由を小泉八雲自身はこう述べた。「すべて教育を受けた人は何処へ行っても同じ事を言うので、自分の研究の資料にはならない。無教育で文盲の老人こそ古い日本の息吹を伝えてくれるので興味ある研究対象である¹⁾」ここに小泉八雲の教育観が透けて見える。そこに小泉八雲の教育に対する物の見方の二面性がみられる。教育を受けたものが何処へ行っても同じことを言うということは、一方では教育の持つ普遍性を担保しているものの、他方では個性や独自性のなさを意味していると言える。科学教育の世界ではそれは当然の原理である。しかしこと教育の面では、それはむしろ厄介な問題をはらんでいる。それは人文教育の根幹とその目的に関わっているからである。人間の教育の目標は全く同じ反応の人間を作ることではない。J. S. ミルは一般教養の目的は幸福の実現にあると述べているが、幸福そのものの概念は誰にとっても共通する唯一のものではない。なぜなら人間は多様だからだ。もちろん、科学を学習することは多様性を産むのを阻害することに直接つながるものではないことは、ここで確認しておきたい。ともかく、教育は個性などをなくす側面があるという指摘に対しては、その人の意味する教育は本当の教育と言えるのかも考えていただきたい。当然のことながら、個性や創造性を阻むようなものは教育とは呼べないだろう。軍事鍛錬など極端な例を考えればわかるが、画一的な教育と人文教育とを決して混同すべきではない。一方的な詰め込み主義は、本来の教育を意味するものではないからである。もしそうであるならば、そうした教育によって生み出される科学や人類の発展はありえないだろう。何も考えず同じ実験だけを繰り返す科学者には、発展性はないだろう。

この西田とのエピソードの明かすもう一つの面は、無養育で読み書きができない老人こそが日本の息吹を伝えているという小泉八雲のことばである。小泉八雲にとっては知的に西洋文化とは一切接していないものがその土地の伝統文化を純粋な形で伝えられると思えたのだろう。これは、当時彼の周りにいた西洋文明を盲目的に崇める日本の知識人に対して批判していることばにとれる。知識として西洋文化に触れる機会のないものたち、すなわち、無教養で読み書きができない老人を興味の対象として重要視するのは、彼らの中に純粋培養的な日本文化が息づいていると小泉八雲は考えていたのだろう。西洋文化に毒されていない日本文化をその目で見たかったのだろう。

こうして考えてみると、最終的にこのエピソードが伝えるものは、当時の日本における西洋化の教育について、小泉八雲が懐疑的だったことである。さらに、小泉八雲が求めたものは、西洋文化から独立した文化だったのである。当時は現代ほど重要視されていなかった地方文化や伝統などに対して、先進国の西洋人としてではなく、一介の文化人として積極的に理解したいと言うのが本音だったと思える。初めての赴任先が松江だったということは、伝統的な日本文化に興味を抱いている小泉八雲にとっては僥倖だった。赴任先の学生や生徒たちへの教育を通して小泉八雲はそうした教育観をどのように発展させていったのかを考えてみたい。

明治初期の小泉八雲を取り巻く教育

小泉八雲は、島根県尋常中学校と島根県尋常師範学校（1890, 9～1891, 11）の教師として島根県に赴任した。当時の明治政府は外国からの先端技術の導入に中心を置くためにも、英語教育の重要性は認識していた。赴任する前にどのような経緯があったのかまとめてみると、小泉八雲は、ア

アメリカのニューオリンズで新聞記者をしていた。その仕事を辞し日本に来るきっかけとなったのが服部一三との出会いだたとされている²。1884年12月、ニューオリンズで万国工業兼綿百年期博覧会が開催された。『ハーバース・マガジン』誌の依頼で会場取材した小泉八雲は、特に日本館の展示品に興味をもち、1885年1月、そこに派遣されてきていた服部一三と会っている。服部一三は1884年10月に農商務省御用掛に発令されて偶然にそこに参列していた。服部一三は1875年11月、東京英語学校長心得に就任し、同校長、東京大学予備門主幹、兼東京大学法学部・文学部総理補、大阪専門学校総理、東京大学法学部長兼同予備門長などを歴任し、1882年2月には東京大学幹事を務めた人物で教育行政に造詣が深かった。小泉八雲と出会って以降も、文部省書記官に就任し、兼文部省参事官、同省普通学務局長などを務めている。またその後、広島県知事も務めた。服部一三はアメリカでの留学体験から、当時は非常に進歩的で西洋的な教育思想を持っていた。その彼との交流がなければ、小泉八雲の来日はなかっただろう。また、小泉八雲の日本への関心のきっかけは服部一三だけではなく、以前から抱いていた異文化への知的関心もその一因だったと風呂鞆は言うのである。「フランスの作家ピエール・ロチの著作や彼との交流からも、小泉八雲の日本への憧れ・関心は深まっていった」と述べている³。ロチなどから影響から異文化への興味を募らせていたからこそ、極東の日本に来ると言う決断をしたのだと言うのである。

その後、小泉八雲はビスランドから米海軍主計官 M・マクドナルドを紹介され、マクドナルドは、帝国大学文科大学の博言学教授の B・H・チェンバレンを紹介する。早速チェンバレンに求職依頼の手紙を送った。当時は服部一三が文部省の普通学務局長の職にあり、チェンバレンと服部一三の二人の尽力によって、ハーンは島根県の尋常中学校に英語教師として赴任した。

このような事情から小泉八雲は教師になったのだが、英語教育をめぐるはまだ当時の政府の考え方は二分されていた。そのためにも、当時の明治政府とその時代背景を知ることは彼の教育観を考える上でも意味がある。小泉八雲がどのような経緯で教壇に立つようになったかは大きなことである。

一時、服部一三の上司でもあった国語外国語化論の提唱者の一人として有名な薩摩藩出身の森有礼(1847～1889)について言及したい。森有礼は福沢諭吉などと日本の啓蒙を目的としていた明六社などの活動から、第一次伊藤内閣で初代文部大臣を務めた。しかし、1889年2月11日の大日本帝国憲法発布式典の翌日にその森有礼は急進的な国粹主義者から短刀で殺害された事件が起こった。それは小泉八雲が赴任するわずか1年半前のことである。当時の急進的な欧化主義者は保守的な国粹主義者たちにはまだまだ簡単に容認されていなかったことを物語っている。

当時はその欧化主義に反発する急進的な国粹主義者の意見も強く、小泉八雲の教壇を取り巻く環境は外国の英語教師に対して厳しい態度を取るものもいた。それは大人ばかりではなく小泉八雲の教える生徒たちの中にもいたのである。「ある保守主義者」の中で、教師に隙あれば切りつけようと相談する生徒が描かれているがそれは決して強調のため書かれた挿話ではない。おそらく小泉八雲が直接感じ取った生徒の本音が現れている。もちろん、教師として信頼されてからはそのようなことはなかっただろう。学校の講義を受ける学生と教師との関係は真剣勝負だったというのは比喻だけではない。以下の教師の背後でおこなわれた生徒の会話からも伺えるだろう。

The teacher himself could never have imagined the comments made upon him by his two-sworded pupils; nor would it have increased his peace of mind, while overlooking compositions in the class-room, to have understood their conversation: —

“See the color of his flesh, how soft it is! To take off his head with a single blow would be very easy.”⁴

面白いエピソードであるが、教師の首をいとも簡単に一刀両断に切り落とせると言う生徒の会話を聞いて、この英語教師はぞっとさせられている。もちろん、これはフィクションであるが、日本の学生たちが決して本音を顔に出さない教育の現場でのやり取りであり、実際にそのようなことはなくとも、小泉八雲が英語教師としてその背中で感じていたことだろうと推測される。少なくとも、喜怒哀楽を出さないように躰けられている生徒たちの被っている仮面に対して恐怖感を覚えたのは当然のことだろう。そこに教壇に立って戸惑っている小泉八雲を含む外国人英語教師たちの姿が見て取れる。冗談のようだが、こうした恐怖心を克服しながら、英語を教える外国人英語教師は命がけだったろうと思われる。

島根県尋常中学校時代の教育

高瀬彰典は松江時代として、小泉八雲の中学校での様子を述べている。それによれば、島根県尋常中学校で週 20 時間、および師範学校で週 4 時間の授業を受け持ち、会話、リーディング、英作文、聞き取りを担当したとある。さらには、自ら信じる教育理念を実践し、難しいことでも生徒を几帳面に指導し、黒板に綺麗な絵を描いて分かりやすく親切に説明したとされている。

英語教師として、基本的な英語の 4 技能を向上させることを目的とした科目を担当している。中でもおそらく、控えめな中学生の口を開かせなくてはならない英会話などの授業では、最初は戸惑いを感じるが多かったであろうと推測される。しかし、リーディングに関しては、日本人の英語教師もいることから、当時の学生の語彙力や理解力は現在と比べても相当あったと思われるが、音読についてはさらに問題も多くあっただろう。

そして、中でも英作文の授業に、小泉八雲はかなり心血を注いだように思われる。英会話では生徒たちはなかなか本音を語る事は少ないが、口ではうまく言えなくても、英作文を書かせれば、他人の理解を拒む生徒たちでさえ、本音を語り、彼らの心情をかなり理解できたのではないかと思われる。また、もう一つ小泉八雲にとっては、英作文には別の意味もあったように思う。それは生徒たちからの直接的な日本文化の情報収集である。あまり日本語ができなかった小泉八雲が当時一般の人々の風物を理解するのにかなり役立ったのだ。生徒たちの語る飾りのない英作文で、日本の虫や生活の中で見受けられるさまざまな出来事などについて生徒たちに調べさせそれを英語で書いてもらうのだ。日本語のあまり読めなかった小泉八雲にとっては、その後書くことになる随筆などのいい材料になった。

その英作文という授業を通して、小泉八雲が気づいたのが日本の教育のもつ画一性だった。生徒たちの作文内容の画一的なことに気づいたのである。アイルランドなどで小泉八雲が受けた教育とは全く異なることに気づいたのである。それは画一的なことを求めすぎると個性を失うことになる。生徒たちの個性のなさに、教育の影響の大きなことに気づいた。彼は親しみやすい作文のテーマを与えながら、生徒たちの独創性を涵養しようと務めた。その時に大きな役割を果たすのが想像力の機能である。

英作文では正直に自分の言葉で自分の考えを簡単な英語で書くことを生徒たちに求めた。これは当時の英語教師、特に日本人の英語教師などと異なっているところだった。ともすれば、できるだけ難しい語彙を覚えさせ、伝統文法に則って表現する手法を教え込み、表現力に重きをおく日本人

英語教師と距離を置き、小泉八雲は何を伝えようとするのかに重点をおいた。そうした彼の英作文教育は、英語の力だけではなく、生徒たちに自分の気持ち感情などについて率直に表現する力を与えようとしたのである。

もう一つこの時代には、小泉八雲が教育活動を通して新たに学んだことがある。それは幼少期より興味があった異界の幽霊たちについてだった。未知のもの、非科学的なものに対する造詣の深さを示すことで、画一教育を打破し、想像力の根源となる好奇心を育てようとした。「日本文明の真髓」(THE GENIUS OF JAPANESE CIVILIZATION)の中で小泉八雲はこのように述べている。

Every serious thinker knows that emotional transformation of the individual through education is impossible. To imagine that the emotional character of an Oriental race could be transformed in the short space of thirty years, by the contact of Occidental ideas, is absurd. Emotional life, which is older than intellectual life, and deeper, can no more be altered suddenly by a change of milieu than the surface of a mirror can be changed by passing reflections. All that Japan has been able to do so miraculously well has been done without any self-transformation; and those who imagine her emotionally closer to us to-day than she may have been thirty years ago ignore facts of science which admit of no argument.⁵

まじめな思想家なら誰でも知っていることだが、教育によって個人の感情を変えることは不可能である。東洋人の感情的な性格を30年という短い期間に西洋思想に触れることで変えられると想像するのは馬鹿げている。感情的な生活は、知的な生活よりも古く、より深いものであるので、鏡の表面が光の反射ですぐに変化するように、環境の変化によって突然変化することはありえないのである。日本が奇跡的にうまくやってきたことは、すべて自己変革なしに行われただけのことだ。そして、日本が30年前よりも今日の方が、感情的に西洋人に近づいていると想像するものたちは、議論の余地のない科学の事実を無視していることになる。

“THE GENIUS OF JAPANESE CIVILIZATION”

小泉八雲は、英作文の授業などを通して、生徒たちや欧化思想を持った日本の知識人の中に見られる頑なな日本人の心情はどのような西洋教育の影響を受けても変化は無いと考えていたのである。

熊本時代の教育

小泉八雲は松江時代をどのように思っていたのかについて日記の中で西田千太郎はこのように書き残している。

ヘルン氏来訪日ク、熊本ナル高等学校ニ転任ヲ勸メラレ（月俸二百円）、畧応 聘ノ事ニ決心セリト。松江ノ気候同氏ニ適セザルガ為メ、近來稍、病身トナラレシヲ以テ転地ハ同氏健康ノ為メ必要ナルベキカ⁶。

熊本赴任の動機を西田千太郎は俸給と気候のためと見ているが、小泉八雲がはっきりと転任の理由を述べたわけではない。しかし、何かしらの不満はあったのでは事実だろう。その不満は何なのかわからないが、それが俸給と気候の理由だけとは考えにくい。ともかく1891年11月、小泉八雲は前任者イーバル・クラミーの後任として、当時の熊本第五高等中学校に赴任した。授業時数は

週に18時間だったとされている。当時の学生を小泉八雲はチェンバレン宛の書簡で以下のように評価している。熊本での講義は西川盛雄の「ハーン先生と漱石先生 = = ハーンと漱石の英語授業と試験問題 = =」に詳しい⁷。生徒たちに関してこのような記述が残っている。

The students do not seem to me very different from those of Matsue: they are quite as docile, respectful, gentlemanly, eager to learn--so far as I can see. We became friends at once.⁸

生徒たちは松江の生徒たちとあまり変わらないようだ。私が見る限り、彼らはまったくわたしに従順で、敬意を払い、紳士的で熱心な学生である。だからすぐに友達になった。

このように小泉八雲の熊本での生徒たちに関する限り問題はあまり見受けられない。しかし、「友達になった」ということばが少し気にかかる。この文章の友達であると述べているところに少し不自然なところがあると思う。その理由は、docile という単語は友人には馴染まないからだ。すなわち、これまで松江で接していた生徒たちとの関係と熊本の生徒たちとの関係は少し異なっているような気がしてならない。教師と生徒の関係であるにも関わらず友人になったということばにどこか違和感を覚える。もちろん、生徒の年齢の違いや地域の違いもあるだろうが、その違いが小泉八雲の教育にも反映していると考えるのは妥当である。また熊本時代に小泉八雲は孤独に陥るとされるがその出来事とも少し関連があるように思う。風呂鞆はこう書いている⁹。

西南戦争（1877）の名残が色濃く残っている熊本に移って初めて帝国主義の盛り上がりを受け、排外思想を知って愕然とする。彼が熊本に居る時に日清戦争（1894-95）が起こり、否応無しに日本の極東における地位について考えざるを得なかった。

熊本は地理的に九州の中程に位置し、薩摩とも近かった。当時、西南戦争をはじめとして排外思想がとても強い土地だった。もちろん、大学のキャンパスは西洋人とはいえ教師であり、直接的に排外思想に直面したことはあまり考えられない。しかし、薄々小泉八雲のまわりの人々に何かしら距離感を抱いていたのではないだろうか。それが直接関係するわけではないが、熊本を去って直後から彼は家族のことも考え自分の帰化を決意したのである。彼を取り巻く教え子の中には、将来の日本の未来を決定するようやエリートなどを希望する生徒もいたので、日本の未来について教育を通じて考えさせようとする気持ちは強かったのではなかろうか。

高瀬彰典は熊本時代こそ、小泉八雲が過激な西洋化に批判的になり、日本のアイデンティティの問題を批判するきっかけになった時代だと述べている。

当時の熊本は松江と正反対で、急速な近代化で軍都に変貌しようとしていた。夢中で教師の職務に献身していた松江時代と異なって、熊本でのハーンは日本の教育の装飾的で形式的な制度を鋭く洞察するようになる。教育制度ばかりでなく、教科書の内容や選定、教育方法の問題、過激な西洋化と日本のアイデンティティの問題など多方面にわたって鋭い批判的見解を彼は述べるようになる¹⁰。

こうした批判の一因は、松江時代には見られなかった剛毅朴訥な熊本の人々の言葉遣いと態度とも関わりがある。熊本弁という言葉の持つ激しいことばの響きから、そうした九州以外の人にははとも耐えられないほどの強い口調に聞こえることもあったと想像される。議論が伯仲する中で、知

識人の間ですら時として荒い言葉遣いは耐えられなかったのではないか。メーソン宛の手紙には、その激しい九州人の一面を小泉八雲はこのように書いている。

九州人—普通人—は好きと言うわけには行かない。出雲では万事柔和で古風であった。ここでは、農夫や下層社会は酒を飲む、喧嘩をする、妻をなぐる。私は日本人はみんな天使でもあるかのよう書いたことを思うと間違いにでもなりそうだ¹¹。

これは熊本の手取本町で人目も構わず、妻を殴る相当の身分の人を目撃しての話である。こうした暴力を目撃し、日本人について抱いていた親近感が少し変わってきたとしてもやむを得ないことであろう。さらには熊本の学生の無宗教も嘆いていた。

そうした中であって、小泉八雲を慰めたとされるのが秋月悌次郎（胤永）との交流であった。秋月は会津藩の出身で、会津戦争の責任を問われ終身禁固刑となったが、1872年に特赦によって赦免され、旧制第五高等学校（熊本大学の前身校）の教師で、小泉八雲と同僚であった。彼の人柄について、小泉八雲は以下のように述べたと風呂鞆は述べている。

秋月先生が、天気の良い日に、祝いの品を持って一雄の誕生祝いに来てくださった。小さな盆梅の鉢、清酒を入れた、青竹の珍しい酒筒、それと美しい漢詩を書いた二巻の巻物であった。秋月先生の話がすべて解ったわけではないが、万事なにか一場の楽しい夢のようであった。神様がこの世に現れてまた消えて行くように、にこにこしながら帰ってゆかれた。一切の物を祓い浄めて。客のいない、がらんとした客間には、今でも、何か馥郁とした香ばしいものが残っているような気がする¹²。

白い髭を長く垂らして、白装束に白の束帯を締めて、非常に柔和な顔をして、いつもにこにこ笑っている高齢の老人と小泉八雲自身が評した秋月との交流を通して、熊本時代の小泉八雲は孤独から解放されると同時に、古き良き日本の教師の理想像をそこに見たのである。秋月の講義は厳しく、居眠りをすれば真剣で切り付けられると当時の五高は恐れており、会津武士の精神を背中中で指導したとされ、生徒たちからとても尊敬されていた。その教師を目の当たりにみて、小泉八雲は熊本に対する批判的な気持ちが少し和らいで冷静に生徒たちを見るようになったと思える。

その気持ちは、1894年1月、「極東の将来」(The Future of Far East)と題した特別講演にも表れている。欧化主義や排外主義の厳しい論争の最中にあり、教師として教え子たちに理解してもらいたいことを力強く述べたものである。その講演の前段では、先鋭化する民族間の闘争では知力の高い国が生存競争に勝つのでしっかり学ぶべきだということ、日本はその貧しさを武器にして世界と競争すれば生き残れると言う指針を与えている。そこで、九州人魂のことに言及する。

I thought of what has been called "the Kyushu Spirit". I have heard that simplicity of manners and honesty of life were from ancient time the virtues of Kumamoto. If this be so, then I would conclude by saying that I think the future greatness of Japan will depend on the preservation of that Kyushu or Kumamoto spirit, -- the love of what is plain and good and simple, and the hatred of useless luxury and extravagance in life.

「九州人魂」というものを考えている。古来、素朴な礼節と正直な生き方が熊本の美德だったそう。もし本当だとすれば、私はこう結論づける。将来日本が偉大になるかどうかは、その九州

あるいは熊本のもつ魂を維持できるかどうかにかかっている。その魂とは、すなわち、素朴で善良で質素なものを好み、生活の中で無用な贅沢や浪費を嫌うという心構えのことだ。

これは、小泉八雲の独特な考え方ではなく、例えば、パーシヴァル・ローウェルの『極東の魂』の考え方をさらに具体化したものである。それを小泉八雲がこの講演で強調した理由は、日本の将来を担うに違いない教え子たちにとってそれをいうことが教育的だと思ったからである。

このように、古い伝統を守りつつ、日本に世界の中で生き残って欲しいという願望はますます強くなった。将来、西洋は人口減で衰弱し、食糧が枯渇し奪い合いとなる中で日本人が生き残る術は熊本魂しかないとする意見を述べているが、これは現代にも当てはまることだろう。熊本での教師体験から、日本人の中にある九州魂を強く再評価したのではないだろうか。

さて、いよいよ、3年の契約満了が近づき、それを延長せずに、小泉八雲は熊本での教育を終了することになった。教員をしていては著作の時間が十分に取れず、仕事が思うようにすすまないという焦りもあったのではないかと田部はみている。したがって、その後小泉八雲は教育者を辞めて、神戸に行くことになった。しかし、教育者になることに絶望していたわけではない。自分の時間の十分な確保が約束され、教える対象の年齢が上がることで小泉八雲は再び教壇に戻るようになる。そこでまた新たな彼の教育が始まった。

東京の教育

1895年12月、チェンバレンから連絡がきっかけで、帝国大学文学部の英語英文学科の講師を引き受けることになった。最初は難色を示していたが、当時の外山正一学長やチェンバレンの丁寧な説明で納得し、週12時間の条件で承諾したとされている。1896年9月に就任した。授業時間は約束通り、週12時間で、ミルトンの『失樂園』、さらにはテニソンなどイギリスの19世紀ロマン派詩人の詩を講義した。

学生の希望で文科1年生には、ミルトンの『失樂園』を講義したとされている。難しいものを好む学術的な学生たちの要望だったとはいえ、これをテキストに受け入れた理由は、小泉八雲がカトリック嫌いだったので、プロテスタントの作家ミルトンであれば許容範囲だったと思われる。しかし、学生にとってはその詩は理解が難しかったろうと思われる。したがってそのほかは、比較的理解しやすい、浪漫派の詩人の詩を選んだのであろう。当時の教え子の一人、厨川辰夫（白村）は、その著『小泉先生そのほか』で、講義の様子を以下のように述べている。

先生の講義は毎週九時間であった。英文学概論が三時間、作品講読が三時間の外に、詩歌小説戯曲などに関するいろいろの題目に就て、断片的の講義がまた三時間あった。先生の豊かな天分と、断じて、他の模倣を許さないその独創性が遺憾なく発揮せられ、またその特有の趣味鑑識に基ける批判が十分に聴講学生の前に披露せられたのは、主として此断片的講義の三時間であった。幸なるかな、この度、世に公にせられた物は、即ち講義の此部分のみである¹³。

厨川によるこの回想は、小泉八雲の講義の概略をよく伝えていると思う。特に最後の3時間の断片的講義において、小泉八雲の本領が発揮されているように思われる。特に、他の模倣を許さない独創性にこそ、小泉八雲が重点を置いていたことがよくわかる。また、日本人の学生に対する理解が他の外国人に比べてとても深かったと言う感想も見られる。松江中学や熊本御幸で教鞭をとった長

い間の経験によって、日本人特有のものの考え方を熟知していて、それを教育に生かしていると厨川は考えている。彼の講義は、西洋文学についてであるが、「日本人の美感」に訴えようとしてなされていて、そのために際立って読者の注意を引いているという¹⁴。

また厨川は他にも講義の特徴としては、西洋の名文を学生に紹介したこと、必ずしもキリスト教を信じなくてもいいこと、西洋文学の中で花鳥風月やもののあわれを歌ったものを紹介したこと、作品や詩人の批評について詳しい説明をしたことなどを挙げて小泉八雲の素晴らしさを説明している。そしてその根底にある文学理解の仕方として、詩や小説は書齋に独座してゆっくりと味わうべきもので、教室の黒板の前に持ち出すべき性質のものではないと述べたと伝えている。言い換えれば、文学は大学など教室での教育には馴染まないものだと言っているというのだ。そしてその意味でも他の教員に見られない独創性があるという。

その教育法としては、情緒本意の文学教授法をとったとした。当時は帝国大学などでは、主流だった理知本意の教授法とはまったく異なる教育法をとったのである。そこには文学とは本来どんなものかという文学原理を生かした小泉八雲の独特な手法がみられたのである。こうして学生に人気のあった小泉八雲だが、帝国大学を追われることになった。

1903年1月、小泉八雲は東京帝国大学文科大学学長井上哲次郎の名で解雇通知を受け取った。その一片の通知により解雇されたのである。教え子たちはそれに猛然と反発したと言われているが、それにより、小泉八雲は退任した。1904年、坪内逍遙の紹介で、早稲田大学で再び教鞭をとることになった。早稲田大学での講義でも、帝国大学と同様に英文学を講義し、キーツや英文学史などはすべて英語でなされたとされる。講義ノートをとれたのは、片山天弦だけであったと言われている。

教育の成果

英語教師として来日し、英語教師として晩年を過ごした小泉八雲は、その間に教師として何を教育しようとしたのだろうか。普通であれば、一つ一つの講義の記録などは残っていないだろう。しかし、小泉八雲の場合はそうではなかった。教え子たちが小泉八雲の講義の一言一言を一字一句違わずにノートとして書き残したものが残っているからである。その記録から、彼の教育が英文学教育に限られたものではない発信力、創造性、革命精神、共感力、情緒などに関わっていたことが理解される。

田部隆次はその講義筆記の出版の経緯についてこう述べている。

講義筆記を出版してはどうかと私がマックドナルドに進言した時、彼はただちに賛成した。その筆記を提供した人々は茨木清次郎、大谷正信、田部隆次、内ヶ崎作三郎、栗原基、小日向定次郎、落合貞三郎、石川林四郎、岸重次の諸氏であった¹⁵。

こうした講義筆記から、*Interpretations of Literature, Appreciations of Poetry, Life and Literature* などが続々と出版された。田部隆次は「ヘルンはその著書において日本を外国に紹介宣伝したのと日本の学生に西洋を紹介宣伝したのとその功績は同じである」と述べているように、小泉八雲は単に英語を教えるということに留まらず、英語を通じて日本人に西洋を教えたのである。それが意味するものは、西洋を先進国として称賛のまとするのではなく、自らの日本文化の素晴らしいものを顧みてその素晴らしさを西洋に発信せよとの教えだった。また、他にも教育者小泉八

雲のメッセージがいくつか読み取れるものがある。

なかでも“Farewell Address”にこれまで述べてきたことの集大成が見られる。ここの文学作品の批評や作品の鑑賞などを通して文学の持つ影響力の大きさを訴え続けた小泉八雲の本当に伝えたかった精髓がそこに宿っているように思えてならない。まず文学を学ぶ理由を簡潔に教えている。それは文学者の使命と言っていいものだが、諸外国の文学に触れることによってことばでの発信力を持つことである。

For, as I have often said, the only value of foreign literary studies to you (using the word literary in the artistic sense) must be that of their effect upon your own capacity to make literature in your own tongue.¹⁶

しばしば述べてきたように、諸君にとって外国文学研究の唯一の価値は（芸術的な意味での文学という意味だが）、諸君の母語で文学を作る能力に影響を与えるということではなければならないからである。

池田雅之はこうした小泉八雲のマインドを「ハーン特有のコンパラティブ・マインド」として、文学を冷静に比較する能力を表している。文学の持つ力についてさらに、小泉八雲はその社会的影響力の大きさについても何度も言及しており、その世論に対する影響力の大きさを学生に認識させるとともにそれを利用して日本国内のみならず外国に対してもその発信力を高めてほしいと言う教育者の願いを切実に語っている。文学を学ぶと言う事は同時にそれを自分の言葉で発信するという力に変えてほしいと言う願いが伝わってくることばである。

So I think that we may say the chief benefit of these studies to you must be in thought, imagination and feeling. From western thought and imagination and feeling very much indeed can be obtained which will prove helpful in enriching and strengthening the Japanese literature of the future. It is by such studies that all western languages obtain—and obtain continually—new life and strength.¹⁷

だから、この文学研究が諸君にもたらす恩恵として主なものは、思想、想像力、情緒などの分野においてに違いないと言えるだろう。西洋の思想、想像力、情緒などから、未来の日本文学を一層豊かにし、高めるに役立つ実に多くのものを得られる。そうした文学研究によってこそ、あらゆる西洋の言語から新たな生命と力を獲得するし、今後も獲得し続けるだろう。

ここで小泉八雲の言う新たな生命と力というのが最終的に文学研究において学生たちに得られる成果であると言うことを改めて繰り返す必要もないが、まさにそのために教育者である小泉八雲は教壇に立ったのである。またここで注目すべき点は英文学教育のみにそれが限定されていると述べているわけではない。英文学も含めてフランスやドイツさらには古典の文学の世界がそれぞれ複雑に影響しあいながらその成果としてさらに新しい命と力を人類に与えているそう小泉八雲は説いている。イギリス文学だけが世界の文学ではないという意見はともすればイギリス文学に携わるものたちにありがちな独善的な考え方を打ち破るもので、小泉八雲はそうした権威主義に対しても特に注意を払っていたようだ。

さらに小泉八雲は文学の持つもう一つの機能について言及している。それは創造性についてである。

Literature must be creative, and borrowing, or imitating, or adapting material in the raw state—none of this is creative. Yet it is natural that things should be so. This is the period of assimilation; later on the fine result will show, when all this foreign material has been transmuted, within the crucible of literature, into purely Japanese materials. But this can not be done quickly.¹⁸

文学は創造的でなければならず、生の素材を借用したり、模倣したり、脚色したりすることは、いずれも創造的とはいえない。しかし、物事がそうであることは自然なことだ。今は同化の時期で、その後、この外来の材料がすべて文学という坩堝の中で、純日本的な材料と混合したときに、すばらしい結果が現れる。しかし、それはすぐにできることではない。

もう一つの教えは、俗物に対する考え方についてである。これは小泉八雲が特に何度も気にしていたことである。例えば、シェークスピアなども彼の時代には、下品だと非難されていたことは周知の事実であるが、これはその時代において比較的的成功していて知識のある人間から見れば新しい試みをする者たちは皆俗物だと非難されていたと言う事実から小泉八雲はそのように述べている。

The reproach of the “vulgar,” I mean the reproach of vulgarity, would have been brought in Pope’s time against anybody who should have tried to write in the form which we now know to be much superior. I have told you also how the great literatures of France and Germany were obliged to pass through a revolution against classical forms, which revolution brought into existence the most glorious work, both in poetry and prose, that either country ever produced.¹⁹

ポープの時代には、現在でははるかに優れているとわかっている形式で書こうとする者に対して、「俗物」という非難、つまり下品という非難をしてきた。フランス文学やドイツ文学などの偉大な文学が、どのように古典的な形式に対する革命を経なければならなかったかをこれまで述べてきたが、まさにその革命によって、詩でも散文でも、どちらの国でもこれまでにない輝かしい作品が生まれた。

普通であれば、俗物などは非難の対象ともなろうが、それを古典主義者たちから言われたときに果たしてそうした非難は正しかったのかそのように小泉八雲は問いかけているのである。むしろそうした非難されたものは逆に新しい文学の試みとして今日では高く評価されているということ、つまり、固定化した世界で新しいものは、新しいというそのことだけで、たとえそれが芸術的であろうとも非難を受けた過去の事例に言及して、学生たちには古典や権威に対して革命を起こしてもらいたい。そうすることでしか達成できないどこか素晴らしい新しいもの想像してもらいたいという切なる願いがこのことばに含まれている。これまで西洋の世界ではそうした革命が何度も起こり、新しいものが生じてきたことを、これまでイギリスロマン派の詩や詩人たちを紹介することで講義の中で具体的に示していたのである。ロマン派の詩人たちのことばは、ワーズワースが主張したように農夫の言葉である。その俗悪さこそ、逆にロマン派の精神を支えるエネルギーとなり、人々を、小泉八雲を含めた当時のものたちを魅了したのだ。

さらに、もう一つ大事なことがあった。それはそうした文学を支える情緒である。

I hold that it is the man of exact learning who best—providing that he has a sympathetic nature—can master to good result the common speech and the unlettered poetry.²⁰

学問があるにせよ、共感できる性格でなければ、一般的な会話や無教育な詩を克服できないと考えている。

共感できる資質こそが、文学理解の要であり同時に人間理解の要だというのだ。教え子として、厨川辰夫が小泉八雲と別れた時のことばが以下のとおりである。

憶ふ、明治三十六年房月某日、先生はついに文科大学をさられた。これほど立派な講義を為らされた先生、教師としても精勵恪勤の人で会った先生、學生の尊崇敬慕を一身に集めて居られた先生、此人あるが為に當時私たちの母校が世界に知られてゐた程の此先生をして、遂に去らざるを得ざるに至らしめた者は、・・・噫、私は之を言ふに忍びない²¹。(旧字体等はそのまま引用した)

教え子、厨川辰夫のことばにならない感動の声を直接伝えているこの「噫」ということばからも、小泉八雲の教育の成果は存分に報われて、素晴らしい情緒的な人間を後世に残したことがよくわかる。もう少し、理知的なことばを用いようとすればそうできたと思われるが、単に「噫」という歎息になった。その文字にはさまざまな情念が感じられる。恩師の退職をそうした尊崇敬慕の念で見送る教え子の姿と教え子のその後の活躍を見ると、それこそが小泉八雲の教育の目指したものであるということが明察できよう。それは情緒を理解でき、想像力があり、脅しによる権威主義に反対できる強い魂を持った人間を教育して生み出すということだったのでないだろうか。

最終的に小泉八雲の教育とはここにある。すなわち、日本に来て以来実践した教育は、明治当時の教育環境では当然のこととされていた武士の教育を土台にした鍛錬をただ繰り返すものとは大きく異なり、情緒教育を中心とした想像力を高める教育だった。そこには権威主義などに自由に反対できる勇気を与えてくれる慈愛に満ちた真の教育がある。したがって、それを実践しようとした教育者小泉八雲の存在は決して忘れるべきではないだろう。

註

¹ 『座談会旧師八雲先生を語る』（島根県立松江中学校英語科，昭和15年）p.50.

² 風呂鞆『教師ラフカディオ・ハーン』修士論文

³ 風呂鞆『教師ラフカディオ・ハーン』修士論文

⁴ Lafcadio Hearn, *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*, p.206.

<https://itunes.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewBook?id=0>

⁵ Lafcadio Hearn, *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*, p.15-16.

⁶ 『西田千太郎日記』（注4）十月八日付に次の記載がある。（p.128）

⁷ 1893年、ハーンの試験問題は、『カーライルは、学生から何を読めばいいのでしょうか』と問われて「永遠なるものを読みなさい」と答えたという。この出来事についてコメントを述べ、良い書物における「永遠なるもの」とは何かについて自分の意見を述べなさい。』だった。

file:///Users/kaijimatashi/Downloads/20161124_Nishikawa.pdf

⁸ *Some New Letters & Writings of Lafcadio Hearn*『小泉八雲書簡集』（研究社 昭和25年 p.119。市河三喜編集

⁹ 風呂鞆『教師ラフカディオ・ハーン』修士論文，p.40.

¹⁰ 高瀬彰典「教育者としての小泉八雲」島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第39巻 69頁。

-
- ¹¹ 田部隆次『小泉八雲』北星堂書店、1980、p.111.
- ¹² 風呂鞆『教師ラフカディオ・ハーン』修士論文、p.97.
- ¹³ 厨川辰夫『小泉先生そのほか』積善館 1911年6～7頁。
- ¹⁴ 厨川辰夫『小泉先生そのほか』積善館 1911年12頁。
- ¹⁵ 田部隆次『小泉八雲』北星堂書店 1980、p.244.
- ¹⁶ Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, London William Heinemann, 1916, p.369.
- ¹⁷ Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, p.369.
- ¹⁸ Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, p.370.
- ¹⁹ Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, p.371.
- ²⁰ Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, p.372.
- ²¹ 厨川辰夫『小泉先生そのほか』積善館 1911年47頁。